

魯迅『野草』の中を透過した日本その他

秋吉收著
魯迅 野草と雑草

吉田 富夫



A5判 398頁
九州大学出版会
[本体5800円+税]

魯迅の『野草』を語るとき、論者の口調はともすれば熱を帯びます。作品のもつエネルギーに引き込まれるせいかと思われませんが、秋吉收氏は意識してそうした磁場から距離をおき、もっぱら『野草』が生み出された周辺世界を手探りすることに力を注いでいます。

その構成は、序章を含む全四部一三章、それに『雑草』として訳された全編の新訳から成っていますが、その主な意図を著者のことばで示せば、以下ようになります。

第Ⅰ部「『野草』論」Ⅱ『野草』を構築する要素としては従来全く注意が払われてこなかった文芸新聞、北京『晨报副刊』の発見を主軸としつつ、徐玉諾、ツルゲーネフ、与謝野晶子らの関与について子細に繙きながら、『野草 (Ye-cai)』成立の蔭に埋もれてきた新事実を発掘する。

第Ⅱ部「『影の告別』論」Ⅱタゴール、徐志摩、周作人という魯迅との関係が決して良好とは言えない（むしろ敵対関係にある）文人たちと魯迅が、文学の上では意外に深い交流を有していた可能性について考察を試みた。

第Ⅲ部「『野草』と日本文学」Ⅱ与謝野晶子、佐藤春夫、芥川龍之介の順に、魯迅及び『野草』との接点を探求した。その結果、魯迅と日本との関係がこれまで認識されていた以上に深く濃密なものであったことを解明できた。

第Ⅳ部「『詩人』魯迅」Ⅱこれまで、詩人の称号が『献上』されてきた魯迅の文学について、魯迅自身の意識を検証することで、その実像に回帰させることができた。

ばくは若い頃に『野草』について論文を一篇書いたきりで、その後は何もやってきていませんから、本書に書かれている

ことはすべて初見で、その意味で感想めいたことを言うことしかできませんが、「序章」でいきなり、『野草』執筆に先立つ四年も前の一九二〇年に魯迅の弟の周作人が『晨报副刊』に与謝野晶子の「雑草」と題する詩を「野草」と訳して載せていたり、魯迅自身も菊地寛の小説『三浦右衛門の最後』の翻訳で「雑草」を「野草」と訳していることなどを示されると、「野草」というありきたりのように思っている言葉にある種の歴史的来歴があることを教えられます。そのところを著者は「魯迅の中の日本を透過した研究」という風に呼ぶのです。

魯迅や周作人が日本留学時代から、当時日本に翻訳・紹介された西洋思想を懸命に吸収し、ある場合にはほとんどその一部を引き写すようにして論文を書いたりしたことはここ最近随分研究が進んでいます。本書も広い意味ではその流れにあります。こと散文詩集『野草』に限って言えばこれほどまとまった仕事はほとんど始めてで、著者には開拓者の苦心があったと思われます。ここでは与謝野晶子、佐藤春夫、芥川龍之介の三人が取り上げられています。よくとして興味深かったのは第三部に収められた「魯迅『野草』と芥川『わが散文詩』」、「魯迅『野草』と芥川『春服』あたりでした。『野草』の「秋夜」と芥川『椎の木』、『野草』の「過客」(著者は「旅

人」と訳しています)と芥川の「往生絵巻」とを比較・検討し、一九二三年五月に出版された『春服』が一九二四年九月以降に書かれた『野草』の「主要な素材の一つであった」と推定するものです。むろん、直接そのつながりを示す根拠などありませんが、著者の指摘する作品世界の響きに耳を傾けると、確かに呼応するものがありそうに感じられてきます。

むろん、こうした日本の文学者だけに著者の注意は向けられているわけではなく、同時代の中国文学界の動向が視野に入るのは当然ですが、なかでも多くの注意をひいたのは、第一部第一章の「徐玉諾と魯迅」でした。徐玉諾という詩人はよくが知らないだけでなく、広く文学界で長く忘れられた存在でした。しかし、彼は一九二〇年代初頭には独特の暗い詩を書いて活躍し、一九二三年には一時期、北京の魯迅兄弟の家に入りし、兄弟に請われてロシアの盲目詩人エロシエンコの帰国に付き添った人でした。本書で著者は、いくつかの例を挙げてその詩の発想が『野草』の作品に通底するところがあることを論じていますが、この論点の提起も著者による初めてのそれではないでしょうか。むしろ、本書自身が徐玉諾なる忘れられた詩人の発掘としても意味をもつものだったと言ってもよいでしょう。しかも、後になって魯迅が作家蕭軍宛の手紙で、徐には会ったことがないという謎めいたこと

を述べた（一九三四年）、というおまけ付きで。

しかし、発掘と言えば、最終の第四部第二章が白眉でしよう。ここで著者は、創造社の成仿吾が一九二三年五月、『創造週報』創刊号に発表した「詩之防御戦」なる評論に目をつけた。雑誌誌面で一一頁、約一万字にもおよぶこの長編評論で、成仿吾は「試みに私たちの詩の王宮がいまどうなっているか見てみよう。かつての腐敗しきった宮殿を私たちは打倒し、ここ数年かけて新たに建造しているところの王宮を。何ということだ、王宮の内外至る所に野草（べっそう）が蔓延ってしまった」（ローマ字は著者の訳文のもの——吉田）として、胡適『嘗試集』、康白情『草兒』、俞平伯『冬夜』、周作人、徐玉諾『将来之花園』などの新詩の試みをおしなべて「野草」としてくそみそに叩いたのだとした。

杉村博文教授退休記念

中国語学論文集

杉村博文教授退休記念
中国語学論文集刊行会

現代中国語研究、日中対照研究をテーマとする23編。杉村博文著作目録を付す。

劉丹青、沈陽・吳蕙、原由起子、古川裕、任慶、簡靖倫、西香織、徐雨菜、章天明、木村英樹、鈴木慶夏、橋本永貢子、島村典子、袁曉今、小野絵理、中田聡美、袁毓林・李強、楊凱榮、張恒悅、靳衛士・段靜宜、大西博子、葛靖、胡士雲（掲載順） ■8000円

つづいて翌一九二四年二月発刊の『創造』季刊二巻二期で、

成仿吾が『呐喊』の評論で魯迅の処女小説集『呐喊』を、「凡庸」「拙劣」「一文の価値もない」などとしてけなし、「不周山」のみに多少の価値を認めたことは、よく知られています。のちに、魯迅は『呐喊』一三版から「不周山」を削除し、「補天」と改題して『故事新編』に収録し、その序文でかつての成仿吾の攻撃に手厳しい反撃を加えたことはよく知られています。それは後のこととしても、こうした点からみて、『詩之防御戦』と『呐喊』の評論は魯迅の中で成仿吾なる人物において一繋がりであったことは間違いありません。

果たせるかな、『創造週報』が廃刊になった一九二四年五月から半年後に創刊した『語絲』創刊号で魯迅は「文壇上の一切の野草を一掃すれば、当然、気分は壮快だろう」と皮肉り、

現代中国語の重ね型

認知言語学的アプローチ

張恒悦 著 重ね型という言語現象が中国語文法体系の中で果たす役割を系統的に解明する。 ■4762円

中国語と日本語における目的表現の対照研究

戦慶勝 著 目的表現の枠組みや形式間の結びつきを、個別研究と対照研究によって追究する。 ■7800円

白帝社

※価格は税別

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

その三号から『野草』の掲載を開始します。そこから、著者は、『野草』を自己の詩集に冠したことで、成仿吾によって最も拙劣なものとされたその『野草』こそが（自分にとって）唯一の『詩草』であることを、高らかに宣言したのである」とし、『野草』の命名も、『三閑集』等其他の作品集と同様にそれ自体が闘争の宣言であり、諷刺と機知に富んだ、魯迅らしい命名であった」とします。この指摘もある意味では文学史上の（発掘）ともいべきで、このように見れば、『華蓋集』に始まるとされる〈雑感〉による魯迅の〈挣扎〉の助走は『野草』ですでに始められていたことになりましょう。

〈雑感〉を通じて見てとれるテーマの一つは若い世代との論争ですが、自分を〈時代の落伍者〉と罵る若い世代の未熟さが透けて見え、彼らを信じ切れないところに魯迅の絶望がありました。そうした流れの源流に『野草』を置いてみれば、この散文詩集のこれまでとは違った側面が見えてくるかも知れない——著者の仕事は、そうしたヒントを与えているように見えます。

いまは亡き畏友杉本秀太郎は詩人論『伊東静雄』で、擬態のある詩人のある詩句（「わがひとに与ふる哀歌」）に騙されて、ありもしなかった伊東の恋人探しを繰り返して虚構の〈静雄伝〉を重ねるおびたしい伊東静雄論を皮肉って「トマトの

連作」と呼びました。明け暮れおなじトマトばかり植えていて、ますます味が落ちるの謂いです。ぼくらの魯迅論にもトマトの連作の気味がありはしないでしょうか。

たとえば、あまりにも有名になった「横眉冷对千夫指、俯首甘為孺子牛」の句にしても、毛沢東の断章取義によってあくまで人民に奉仕する意思を示すとされ、いまでもその線上でトマトが植え続けられています。これは本来は題名のとおり「自嘲」の詩で、世間の前ではつんとして格好つけて見せてはいませんがね、なに、家にもどればこの年でできちゃったガキを背中に乗せて這い這いさせられていますのさ、というほどのところでしょう。そうした情況のなかで、自分もかつてトマトを植えた覚えのある一人として、本書のような地味な仕事で魯迅論に加えられたことは、喜ぶべきことに思えます。たとえあれこれと熟さないとこがあるにせよ、そこそが開拓者の名誉です。

（よしだ・とみお 佛教大学名誉教授）